

子宮頸がん予防ワクチン（HPV ワクチン）の説明書

不活化ワクチン
筋肉内注射

ヒトパピローマウイルス感染症とは	ヒトパピローマウイルス（HPV）に感染しても、多くの場合はウイルスが消失しますが、一部の人で前がん病変を経て、浸潤がんに至ることがあります。子宮頸がんの50～70%は、HPV16、18型が原因とされています。子宮頸がん罹患率は20代から増加し、40代でピークを迎え、年間約11,000人が発症し、年間約2,900人が死亡する重大な疾患です。ワクチンでHPV感染を防ぐとともに、前がん病変を予防する効果が期待されています。
ワクチンの種類	シルガード9 (9価HPVワクチン)
ワクチンの効果	ヒトパピローマウイルス(HPV)6型、11型、16型、18型、31型、33型、45型、52型、58型の9つの型のウイルス感染を防ぐことができ、子宮頸がんとその前がん病変、外陰上皮内腫瘍、膣上皮内腫瘍、尖圭コンジローマなどの発症を予防します。
標準的な接種回数・間隔	【2回接種の場合】 （1回目の接種が15歳未満に限る） 6か月以上の間隔をあけて2回接種。 【3回接種の場合】 1回目から2か月以上の間隔をあけて2回目を接種。 1回目から6か月以上の間隔をけて3回目を接種。
ワクチンの副反応	○頻度50%以上:注射部分の痛み ○頻度10%以上:注射部分の腫れ・赤み、頭痛 ○頻度1～10%未満:めまい、悪心、下痢、注射部位のかゆみ、発熱、疲労、注射部位の内出血等 ○頻度1%未満:嘔吐、腹痛、筋肉痛、関節痛、注射部位の出血・血腫・しこり、倦怠感等 ○頻度不明:感覚鈍麻、失神、手足の痛み等 ※まれに報告される重い副反応として、アナフィラキシー様症状、急性散在性脳脊髄炎、ギラン・バレー-症候群、血小板減少性紫斑病等が報告されています。 予防接種を受けたあと、副反応がおこった場合は医師の診察・治療を必ず受けてください。その後、東大阪市保健所までご連絡ください。
定期接種対象者	小学校6年生から高校1年生相当年齢の女子
受けることができない人	○ 明らかに発熱している人（通常は37.5℃を超える場合） ○ 重い急性疾患にかかっている人 ○ このワクチンの成分によってアナフィラキシー（通常接種後30分以内に出現する呼吸困難や全身性のじんましんなどを伴う重いアレルギー反応）をおこしたことがある人 ○ 妊娠中もしくは妊娠している可能性のある人 ○ その他、かかりつけの医師に予防接種を受けないほうがよいといわれた人
予防接種を受けるに際し、医師とよく相談しなければならない人	○ 血小板が少ない人や出血しやすい人 ○ 心臓血管系疾患、腎臓疾患、肝臓疾患、血液疾患、発育障害などの基礎疾患のある人 ○ 過去に予防接種を受けたとき、接種後2日以内に発熱、全身性発疹などのアレルギーを疑う症状がみられた人 ○ 過去にけいれん（ひきつけ）をおこしたことがある人 ○ 過去に免疫状態の異常を指摘されたことがある人、または近親者に先天性免疫不全症の方がいる人 ○ このワクチンに含まれる成分にアレルギーをおこすおそれのある人
ワクチン接種後の注意	○ 接種後に、めまいやふらつき、失神、重いアレルギー症状が起こることがあるため、接種後はすぐに帰宅せず、30分間程度は座って様子をみてください。 ○ 接種後は、接種部位を軽くおさえる程度にし、揉まないようにし、清潔に保ちましょう。 ○ 接種後翌日までは、過度な運動を控えましょう。 ○ 接種当日の入浴は問題ありませんが、注射部位を強くこすことは避けてください。 ○ 接種部位以外にも激しい疼痛、しびれ、脱力等があらわれ、長期間症状が持続する例があります。異常が認められた場合には、医療機関を受診しましょう。 ○ このワクチンと他のワクチンの同時接種を希望する場合は、医師にご相談ください。

《厚生労働省ホームページ》

ヒトパピローマウイルス感染症～子宮頸がんと HPV ワクチン～

URL : <https://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekkaku-kansenshou28/inc>



東大阪市保健所 令和8年4月